浪花から来た黒き少女

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
浪花から来た黒き少女

【Ｎコード】
Ｎ１９５６Ｅ

【作者名】
ユーリ

【あらすじ】
原作５３巻の怪人２００面相の話の続きに当たる話。コナンが東尾マリアとデートする事に！？その事を知った哀は嫉妬心から２人を尾行する！そして明らかになっていくマリアの秘密・・・果たして、彼女は何者なのか！？

（前書き）

これは、原作５３巻の怪人２００面相の話のその後という事になっています。
マリアの設定が原作とは全くちがいます。
ですので、原作重視の方は遠慮した方が良いと思います。
また、この短編は最終的にはコ哀になります。
その事に関しての批評等は一切受けつけませんので、ご了承ください。
では、本編にどうぞ。

小林澄子による一騒動の後、マリアがコナンに話しかけて来た。

「コナン君、今回の事は灰原哀ちゃんに任したんやね。」

「ああ、先生に呼び出されちまったからな。」

「それにしても、何で哀ちゃんに後の事を任したん？」

「え？何の事？」

「トボケてもアカンよ。ウチ、ちゃんと聞いとったで。哀ちゃんに聞こえるように『ヨロシクな』って言うたんをな。」

「えっ・・・」

「コナン君、もしかして哀ちゃんが好きなんとちゃうの？」

「え！！」

コナンは驚いた。

「な、何言ってんだよ！何か根拠でもあるの！？」

コナンはしどろもどろになっている。

「根拠はあるで？哀ちゃんに後を任せた＝信頼してる・・・これはつまりアンタが哀ちゃんを好きやって事や。」

「う・・・頼む、その事はアイツに言わないで・・・」

コナンは観念したようだ。

「わかった、哀ちゃんには言わへん。その代わり、条件がある。」

「じょ、条件？」

「哀ちゃんにこの事をバラされたくなかったら、ウチと明日1日デートせえ。」

「え？」

「イヤなら、哀ちゃんにこの事バラすまでや。」

「わ、わかったよ・・・」

コナンは渋々承諾した。

「ほな、帰ろか？」

「帰るって・・・一緒に帰るのか？」

「そやで。ウチは今日アンタん家に泊まるんやから。」

「え～っ！！」

「さぁ、行こか～コナン君♪」

マリアはコナンを引っ張り、教室を出て行った。
その様子を、哀が不審に見ていた。
「（何してるのかしら、工藤君・・・）」
哀は、コナンとマリアの後を追った。

マリアとコナンは、並んで歩いていた。
「（あ！マリアちゃん何を・・・）」
マリアはコナンの腕に自分の腕を絡めている。
「な、何するんだマリアちゃん！」
「ええやない！ウチらは明日デートするんやから！」
「なっ・・・」
「（何ですってぇ～！？工藤君が東尾さんとデートォ！？）」
哀は拳を震わせている。
「さ、アンタん家に行くで！」
「う・・・」

「ホラホラ！」

マリアはニコリとすると、コナンの手を引っ張り毛利探偵事務所へと歩いて行った。

「（許さない・・・工藤君とデートするだなんて・・・こうなったら、明日工藤君を尾行するわよ！！）」

哀はやけに燃えていた。

ゾクッ！

探偵事務所に入ろうとしたコナンは、妙な寒気を感じていたという・・・

毛利探偵事務所

「今夜ここでお世話になります、東尾マリアです。よろしゅうお願いします。」

マリアはペコリと頭を下げた。

「ヨロシクね、マリアちゃん。」

蘭は笑顔で挨拶した。

「しかしコナンも隅に置けないな。こんなカワイらしい彼女を連れ込むとは。」

小五郎がニヤニヤしながら言った。

「ち、ちがうよおじさん！そんなんじゃないってば！！」

コナンはしどろもどろになりながら言った。

「照れなくて良いのよ、コナン君。マリアちゃん、ゆっくりしてくれて良いからね。」

「ありがとうございます。」

マリアはそう言うと、チラッとコナンを見た。

その目はどこか笑っているようだ。

コナンが困った顔をしていると、また例の悪寒が走った。

ゾクゥ！！

実はこの時、哀が探偵事務所を見上げていたのだ。

殺意のこもったような目で・・・

「（工藤くぅ～ん・・・絶対に許さないんだからぁ～！！）」

哀は怒りに燃えていた・・・

その夜、コナンは小五郎の部屋で寝ていた。

「スゥ、スゥ・・・」

コナンが寝ていると、マリアが部屋に入って来た。

そして、コナンの布団の中に潜り込んだ。

ゴソッ・・・

「ん・・・ん?」

「コ〜ナン君。」

「うわ!?マリアちゃ・・・」

叫ぼうとしたコナンの口を、マリアが手で押さえた。

「シィ〜!」

「モゴモゴ・・・」

「騒ぐと、ウチが布団に入ってるてバレるで〜?」

マリアの言葉に、コナンは冷や汗をかいた。

「ゴ、ゴメン・・・」

「わかればええんや。さぁ、寝るで〜。」

マリアはそう言うと、スゥスゥと寝息を立て始めた。
コナンは苦笑いをすると、後を追うように眠りに落ちた。

翌朝

「コナンく～ん、朝よ～。」
蘭がコナンを起こしに来た。
パラッ！
蘭は布団をめくると、マリアがコナンにひっついて寝ていた。
「うわぁ・・・」
蘭は赤面しながら、コナンとマリアを起こした。

「ハハハ、傑作だな！朝起きたらマリア君とコナンが仲良く添い寝してるんだからなぁ！」
小五郎は大笑いしている。
「ちがうんだよおっちゃん！夜中にマリアちゃんが勝手に布団に入って来て・・・」

「あらぁ？その割りには満更でもない感じだったけどぉ？」

蘭が笑顔でコナンに言う。

「だ、だから、それはマリアちゃんが・・・」

コナンがごまかそうとした時、マリアがコナンをにらんだ。

ジロッ・・・

「（う・・・）」

コナンは何も言えなくなってしまった。

「ほな、小五郎さんと蘭姉さん。今日1日コナン君を借りますんで、よろしゅう。」

マリアはペコリと頭を下げた。

「まぁ！デート？」

蘭がワクワクしながら聞いた。

「ち、ちが・・・」

「そうです。コナン君と1日デートです♪」

マリアはニコニコしながら言った。

「そうかそうか。じゃあ楽しんで来いよ？」

小五郎もニヤニヤしながら言った。

「はい♪ほな行くで、コナン君♪」

「あ、ちょっ・・・」

マリアはコナンを引っ張ると、探偵事務所を出て行った。

哀は探偵事務所の下にあるポアロで、アイスコーヒーを飲んでいた。

もちろん、何の用事もなくてポアロにいるのではない。

今日コナンとマリアがデートする事を知っている哀は、２人を尾行するべくポアロで待ち伏せしているのだ。

しばらくして、コナンとマリアが階段を下りて来て外に出るのが見えた。

「あ！江戸川君だわ！」

コナンはマリアに引っ張られている。

「絶対にそのままデートなんてさせないんだから～！！」

哀は急いで勘定を済ませると、２人の尾行を開始した。

コナンとマリアは、トロピカルランドへとやって来た。
その2人を、哀が監視している。
コナンは、妙な寒気を感じていた。
「で？どこから回るの？」
コナンはマリアに聞いた。
「そやねぇ・・・。！（あの子は・・・哀ちゃん！）」
マリアは哀を視界に確認すると、ニヤッとした。
「ほな、ウチオバケ屋敷がええ！」
「オ、オバケ屋敷！？」
コナンは驚いた。
「ホ～ラ、早う早う行こ～♪」
「わっ、引っ張るなって！」
マリアはコナンを引っ張って行った。
「オバケ屋敷？そ、そうか！それが狙いね！？絶対に許さないんだから～！！」

哀はコナンとマリアを追って行った。

マリアは案の定、コナンに抱きついている。

「あ、あんまりくっつかないでくれない？」

「そやかて～、怖いんやも～ん♪」

「・・・」

コナンは少し赤面している。

哀はそれに対して怒りを燃やしており、オバケ屋敷の職員は困っていたという・・・

しばらく色々なアトラクションを回って、コナンとマリアは昼食を取っていた。

哀は遠くから、２人の事を監視している。

「なぁ、何か寒気がしないか？」

コナンがマリアに聞いた。

「そか？コナン君の気のせいやないの？」

マリアはトボけている。

哀は遠くでワナワナと拳を震わせていた。

「あ、コナン君頬にソースついとう。」

マリアは布巾を持つと、コナンの顔に近づけた。

「あ、ちょっ・・・」

マリアはコナンの頬のソースを拭き取った。

「〜!!」

哀は怒りが爆発した。

「（もう許さない!!今すぐ2人に詰め寄って・・・）」

哀が駆け出そうとした時、マリアがコナンの席の方に行った。

スッ!

「な、何?」

「ウチ、前からアンタの事が好きやったの。キス・・・してええかな?」

「え?」

「コナン君、好きな人おらへんのやろ?それやったら・・・初キス、

ウチがもろてもええやんな？」

「あ・・・」

マリアはコナンに顔を近づけた。

哀はそれを見て、足を止めてしまった。

「（やっぱり江戸川君、あの子が好きなのね・・・私なんか、彼には似合わないんだわ・・・）」

哀はそう思うと、その場を離れた。

タタタ・・・

「（このまま家に帰ろう・・・）」

出口に向かって走っていた哀は、前から走って来た人にぶつかった。

ドン！

「キャッ！す、すいません・・・」

哀はぶつかった人に話しかけた。

「・・・」

その人物は、無言で哀を見つめた。

「・・・え？」

コナンにキスをしようとしたマリアは、寸前で止めた。
コナンが顔を背けていたからだ。
「やっぱ、止めるわ。」
「え、何で？」
コナンは唖然としている。
「そやかて、アンタの想いはウチやなくて哀ちゃんに向いてるんやもん。やっぱりな。」
「な、何言ってんだよ！オレが灰原を好きになるなんて、そんな事・・・」
コナンは狼狽えている。
「物事に絶対なんてあらへんのや。人間誰かて心変わりはするもんなんや。かつてウチかてそうやったからな。」
「マリアちゃんも？」
「そや。アンタもきっと、あの哀ちゃんを好きに・・・」
マリアがそこまで言った時、突然悲鳴が聞こえた。

「キャ～ッ！！」

「な、何だこの悲鳴は！？」

「哀ちゃんの声や！行ってみよ！！」

コナンとマリアが悲鳴が聞こえた方へと走って行くと、男が哀を抱え首にナイフを突きつけていた。

「オマエら、動くんじゃねぇ！！オレは銀行強盗だ！！」

「ぎ、銀行強盗！？」

コナンとマリアは驚いた。

「そういえば、さっき携帯のニュースでやってたっけ・・・この近くで銀行強盗事件があったって・・・」

「ほな、あの男が犯人・・・」

「いいか！絶対警察に知らせるんじゃねぇぞ！！」

そう言うと、男は哀を抱えて入口まで走り出した。

「え、江戸川君助けてぇ～！！」

叫ぶ哀を抱え入口から外に出ると、男は停めてあった車の後部座席に哀を押し込み自分も運転席に乗り込んだ。

車はそのまま、急発進した。

「た、大変だ！灰原が・・・」

コナンが焦っていると、マリアがコナンの手を握った。

キュッ！

「え、マリアちゃん？」

「助けたいんやろ？アンタの好きなあの子を。」

マリアは真剣な目で見つめている。

「そうだったね・・・よし、行くよマリアちゃん！」

「ああ！」

コナンは持って来ていたターボエンジン付きスケボーにマリアと共に乗った。

「しっかり捕まっててよ！」

「ああ！」

コナンはスケボーを発進させた。

「待ってろよ、灰原！！」

一方、人質に取られた哀は車の後部座席に転がされていた。
手足を縄でグルグル巻きにされ、ガムテープで口を塞がれている。
「ん～、ん～！！」
哀はジタバタともがいた。
「悪いな、嬢ちゃん。これからオマエをオレの家に連れて行く。身代金の要求はその後だ。」
男はクククと笑っていた。
「ん～、ん～・・・（工藤君・・・助けて！！）」

コナンとマリアは、哀をさらった男の車を追跡していた。
「コナン君、車の場所わかるんか？」
「ああ！この追跡メガネで灰原のバッジの発信機を頼りに探してるからね！」
「へェ、そうなん・・・」
「待ってろよ、灰原！すぐに助けて、オレの気持ちを伝えるからな！」
コナンは、スケボーの速度を上げた。

男は、上機嫌で車を運転している。

哀は、俯いていた。

「んん・・・（私が悪いんだわ・・・工藤君にちゃんと気持ちを伝えず、マリアちゃんに嫉妬したから・・・こんな私なんか、彼だって好きにならないわよね・・・このままお別れなのかな・・・）」

哀が目を瞑ったその時、コナンの声が聞こえた。

「見つけたぞ！！」

コナンは叫んだ。

「あの車を止めねぇと！」

コナンは麻酔銃を構えた。

「（連射式になった、コイツで・・・）喰らえ！！」

コナンは後ろのタイヤ目掛けて、麻酔銃を放った。

パシュ、パシュ！

麻酔針は、見事左右のタイヤを撃ち抜いた。

パァン！

「な、何だぁ！？」

キキキーッ・・・

車は急停車した。

ピタッ！

「灰原！！」

コナンとマリアは駆け寄る。

「ち、近づくな！近寄るとこのガキ殺すぞ！！」

男は哀を抱えると、ナイフを突きつけて出て来た。

「んんっ！！」

哀はビクッとした。

「くっ・・・」

コナンは後退りする。

その時、マリアがリュックに手をかけた。

スポッ！

マリアはリュックから何かを取り出す。

それは、木刀だった。

「ん？何だぁ、その木刀は？」

「これはただの木刀ちゃう・・・我が東尾家に代々伝わる、妖木刀『村正』や！」

マリアは強気で言った。

「ナメんなよ、このガキ・・・」

男がそこまで言った時、コナンがベルトに手をかけた。

シュウウウ・・・

ポン！

「喰らえぇぇぇ！！」

コナンはキック力増強シューズで、ボールを犯人のナイフ目掛けて蹴り飛ばした。

ドンッ！！

ボールがナイフを弾く。

「がぁ！！」

男は手を押さえ、その反動で哀が地面に落ちた。

ドサッ！

その一瞬のスキを、マリアは見逃さなかった。

ヒュンッ！！

マリアは男の背後に回った。

「！！」

「お眠の時間や。」

マリアは木刀で男の頭を強打した。

バシィ！！

「がっ・・・」

男は地面に倒れた。

ドサッ！

「灰原！」

コナンは哀に駆け寄ると、彼女を解放した。

その後、男はコナン達が呼んだ高木刑事達に連行されて行った。

「灰原、大丈夫だったか？」
コナンは哀に話しかける。
「フン！」
哀はそっぽを向いた。
「まだ怒ってるのか？」
「フンだ！」
哀はまだふくれている。
そんな哀に、マリアが話しかけた。
「なぁ、哀ちゃん。」
「何よ！」
「そろそろ素直になったらどうや？」
「素直って、何がよ？」
「トボけたかてアカンよ？ウチ、アンタがずっとウチらを監視しとったん見てたんやからな！」
「な！！」

哀は驚いた。

「ホ、ホントかよ？」

「う・・・うん・・・」

哀は尾行を認めた。

「コナン君、もう自分の気持ちにウソつかんでええやろ。告白し？哀ちゃんに。」

「え？」

「コナン君、哀ちゃんの事が好きなんよ。」

「え！本当！？」

哀はコナンの方を向いた。

「あ、ああ・・・実は、マリアちゃんにキスしてもええかって聞かれた時、一瞬戸惑ったんだ。それで、マリアちゃんの顔が近づいて来た時、脳裏によぎったんだよ、オマエの顔がな。」

「え？それって・・・」

「ようやく気づいたんだ、灰原。オレは、オマエが好きになってたんだって。オマエは、オレの事どう思ってるんだ？」

「わ、私は・・・」

哀は一瞬躊躇したが、ついに決意した。

「うん、私もあなたが好き。今日あなたとマリアちゃんを尾行したのも、他の子にあなたを取られたくなかったからなんだってやっと気づけたの。こんな私でよければ、おつき合いしていただけますか？」

哀は頬を染めながら言った。

コナンも頬を染めながら、答えた。

「ああ、もちろんだよ。これからヨロシクな、哀。」

「こちらこそヨロシクね、コナン君。」

「じゃあ、今からまたトロピカルランドに行くか？今度は“デート”としてな。」

「うん、そうしましょ。東尾さん・・・マリアちゃんはどうするの？」

哀がマリアの方を向きながら聞くと、マリアは木刀をリュックに入れながら言った。

「ウチはもう帰るわ。お2人の甘いデートを邪魔したないしな。」

マリアがそう言うと、コナンと哀は赤面した。

「じゃあ、また今度な、マリアちゃん！」

「気をつけて帰ってね、マリアちゃん！」

「ああ、２人こそ気ぃつけてな！」

コナンと哀がスケボーに乗って走り去ると、マリアは不敵な笑みを浮かべた。

「ウフフ・・・見ぃつけた♪」

マリアはタクシーを呼ぶと、そのまま帰って行った。

その夜・・・

マリアは自分の部屋で、どこかへ電話をかけていた。

やがて電話がつながる。

「もしもし？ウチや。」

「オマエか。どうしたんだ？」

電話に出たのは、低い男だった。

「アンタの予測が当たったで。ビンゴやったわ。見つけたで？工藤新一とシェリーの２人を。」

マリアの口調は、急に鋭くなった。

「そうか、でかしたぞ。やはりオマエに頼んだのは正解だったようだな。」

「そやね。ウチは組織内でも優れた探り屋やからな。」

マリアはクスクス笑っている。

「ほんで？今後ウチはどうしたらええの？」

マリアが聞くと、男は答えた。

「オマエが見つけた工藤新一とシェリーを引き続き監視だ。あの方から次の指令が入り次第、また連絡しよう。」

「クスッ、了解♪」

「ぬかるなよ・・・テキーラの愛娘・マール。」

「ああ、任しといて・・・ジン・・・」

マリアが答えると、ジンはフッと笑ってから電話を切った。

「ウフフフ・・・これから楽しなりそうやなぁ・・・」

マリアは、不敵に笑っていた・・・

マリアの後押しで、無事恋人同士になったコナンと哀。

しかし、その恩人東尾マリアは何と黒の組織の一員・マールだった！

一体マリアの目的とは何なのか？

そして、彼女に目をつけられたコナンと哀の命運は！？

全ての運命は、神のみぞ知る・・・

終わり

（後書き）

どうだったでしょうか？
続編は書くかどうか未定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1956e/

浪花から来た黒き少女

2010年10月9日04時28分発行